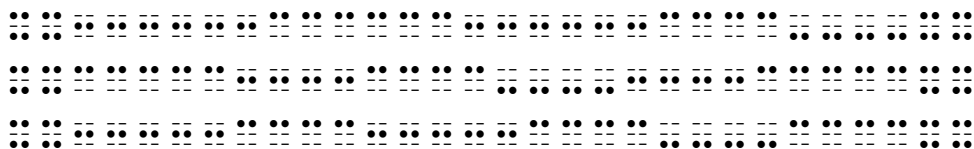
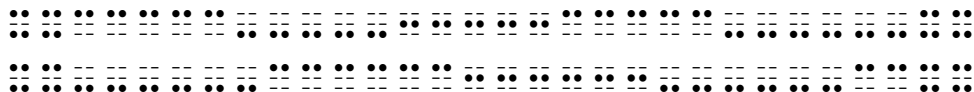


「上 中 下のどれでしょう (1)」



(ねらい及び留意点)

行途中における変化の弁別のための教材である。比較しやすい上下から行い、それを合わせた ⠠⠠ をもとに、最初と最後は ⠠⠠ や ⠠⠠ で明確にしてある。

「上、中、下」と声に出しながら行をたどるなど、興味を喚起しながら楽しんで取り組めるようにしてほしい。

両手指の行たどりに習熟したら、左右それぞれの指で別々にたどる。

第3節 単位となる一マス6点の弁別

1 6点の弁別のための指導方法や工夫

点字は六つの点の組み合わせによって構成されている。読み方向の凸面では、左上から左の中、左下と順に①の点、②の点、③の点で、右上、右の中、右下と順にそれぞれ④の点、⑤の点、⑥の点である。

この六つの点の組み合わせである63通り(マスあけを入れて64通り)を、触覚的に読み取ることによって点字の読みが成立する。したがって、一マスにおける一つ一つの点の位置を正確に弁別できるようにならなければならない。

点字触読の学習については、一マスを①②③の左側の3点と④⑤⑥の右側の3点との半マスずつに分けて弁別の練習を行い、その半マス二つを合

成して読み取れるようにしていく方法など、様々な指導方法がある。

【題材4-11】【題材4-12】で挙げるように、①②③の点と④⑤⑥の点との間隔を広めにして弁別をしやすくしたりする工夫もある。

点字学習指導の方法に唯一絶対はないと第1章で述べられているとおり、永年の研究・指導実践によって様々な指導方法が考えられている。

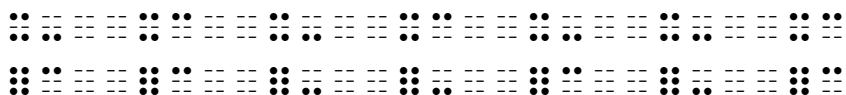
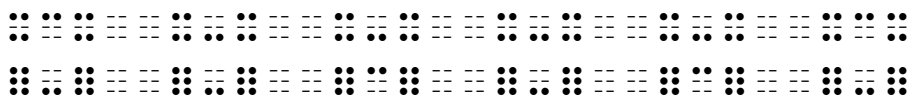
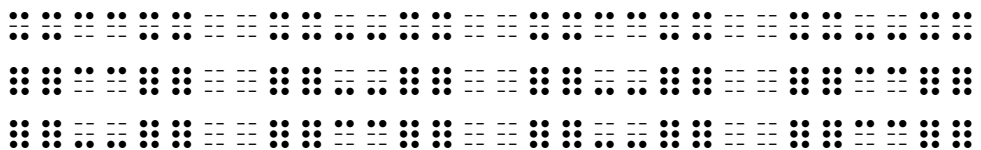
「点字を学ぶ」児童生徒、ひいては「点字で学ぶ」児童生徒のために、ICTの効果的な活用も含めて、今後もより良い方法を模索するべきことは言うまでもない。

2 単位となる一マス6点の弁別のための題材例

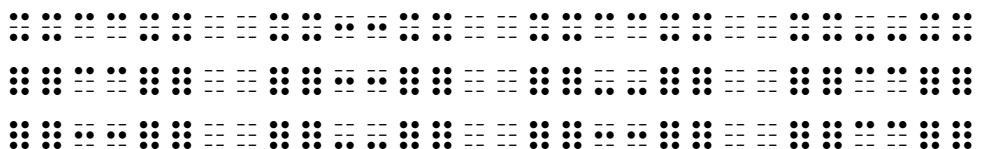
点の位置の弁別の指導方法について、本節では、当初から一マスを1単位として認識することを意図した題材を掲載する。

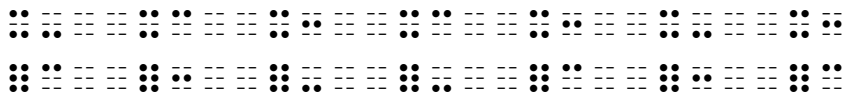
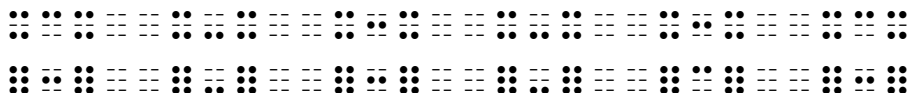
【題材4-9】

「上と下のどちらでしょう(2)」



「上 中 下のどれでしょう(2)」





(ねらい及び留意点)

一マス横段(①④と②⑤と③⑥の点)の意識化教材である。比較しやすい上下から行い、それを合わせた⠠⠠をもとに、最初と最後は基準となる⠠⠠⠠や⠠⠠⠠で明確にしてある。次に、⠠⠠ ⠠⠠の後に続けて示してある。

基準が左右両側にある場合には、左側を手掛かりにしても、右側を手掛かりにしても弁別できるように、両側の基準を使用する。

両側のマスも含めて一マスの感覚(イメージ)を触知できるようにする。

「上、中、下」と声に出しながら触知するなど、興味を喚起しながら楽しんで取り組めるようにしてほしい。

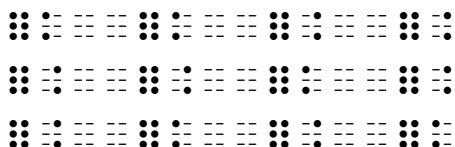
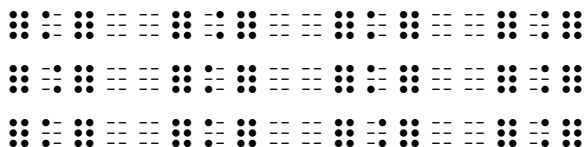
また、点字記号がない部分(記号間の二マスあけ)でも行たどり動作の定着を図るようにする。

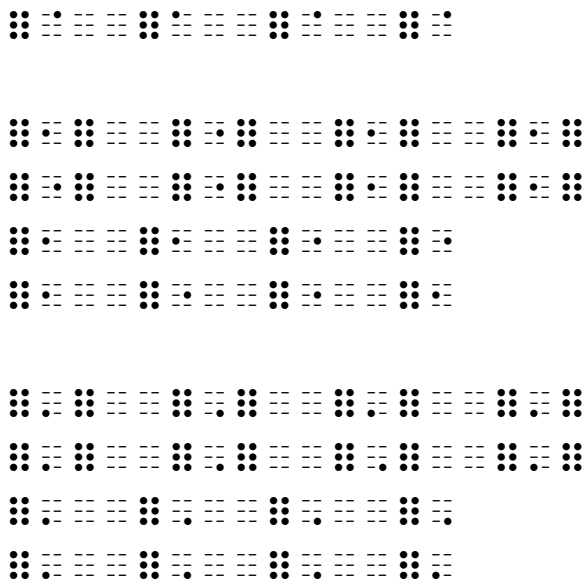
上・中・下の位置の弁別が確実にできるようになったら、行たどりと改行動作の速さを増すようにする。

両手指の行たどりに習熟したら、左右それぞれの指で別々にたどる。

【題材4-10】

「左と右のどちらでしょう(1)」





(ねらい及び留意点)

一マス縦行（①②③と④⑤⑥の点）の意識化教材である。比較しやすい
 ⠠と⠡から行い、最初と最後は基準となる⠠⠡で明確にしてある。次に、
 基準となる⠠の後に続けて示してある。

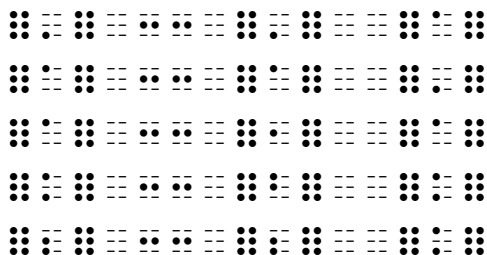
基準が左右両側にある場合には、左側を手掛かりにしても、右側を手掛
 かりにしても弁別できるように、両側の基準を使用する。

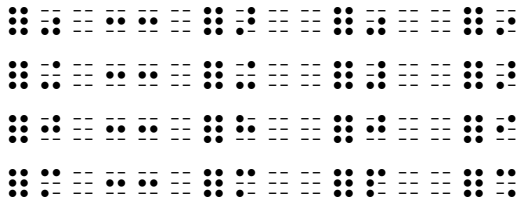
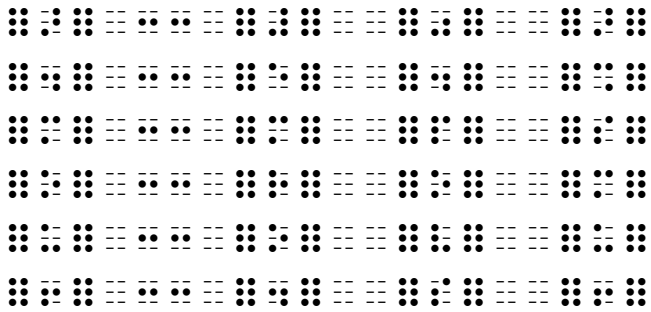
両側の基準マスも含めて一マスの感覚（イメージ）を触知できるように
 する。

「右、左」と声に出しながら触知するなど、興味を喚起しながら楽しん
 で取り組めるようにしてほしい。

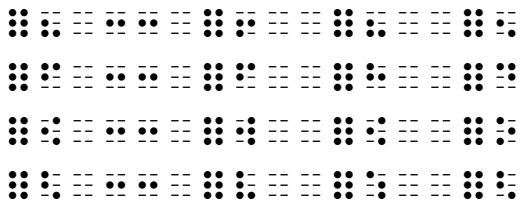
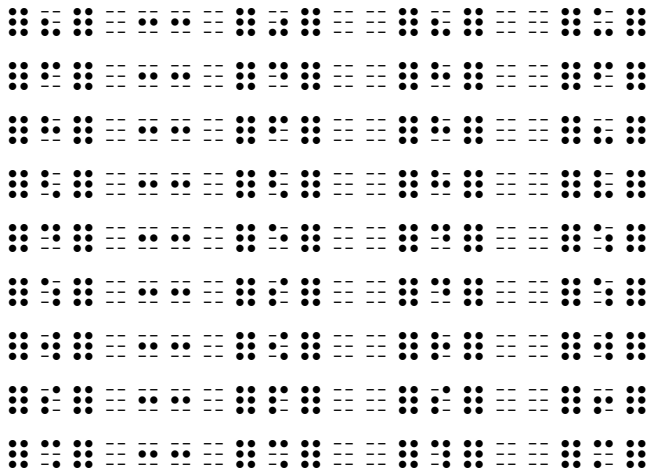
【題材 4－11】

「同じものはどちらでしょう（1）」









「同じものはどれでしょう（2）」



























(ねらい及び留意点)

一マスの6点の弁別のための教材である。「どちらでしょう」は、で囲まれた二つから同じものをみつける。「どれでしょう」は、で囲まれた三つから同じものをみつける。

一マスの感覚(枠組み)を意識づけるために、基準となるで囲んである。

左指を行頭ので囲まれた箇所に固定し、右指で右側の二つ(三つ)を比べながら触る。左右の逆転した形(鏡字)を意図的に盛り込んではあるが、初学の児童にとって左右の逆転した形(鏡字)は、とりわけ弁別が難しく時間がかかるものである。児童によっては混乱してしまうこともある。児童の様子を十分に観察しながら、確実にできるようになった題材や線たどりの練習に戻ってもよいので、急ぐことなく進めればよい。

弁別しやすくするための工夫の一つとして、次のような教材も有効である。二マスを使い、一マス目の④⑤⑥の点と二マス目の①②③の点を一マスに見立てる。そうすると、通常の一マスよりも①②③の点と④⑤⑥の点の間が若干広くなる。     など、弁別が難しい場合は、以下のような形で提示して学習を進めるとよい。
















ただし、この場合も点字に触れる指先が同時に一マスの枠組み全体に触れることができるように留意する。低学年児童の小さな指に大きめの点字を与えてしまうと、マス全体に触れようとして上下に探る指の動きが出てしまうのでよくないからである。
















確実に弁別できるようになったら、弁別の速さを増すようにする。
















同じものを探す際に、「右(左)のが同じ」「まん中のだ」「右端のが同じ」「一つ目かな」「2番目は違うよ」など、言葉を表出させながら探せるようにし、言葉も一緒に育てる意識をもって指導に当たってほしい。

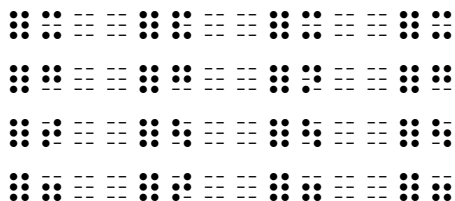
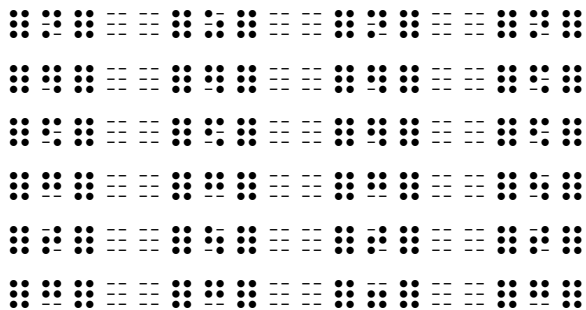
【題材4-12】

「違うものを探しましょう(1)」

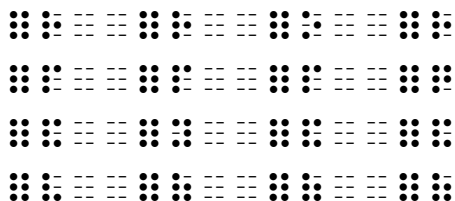
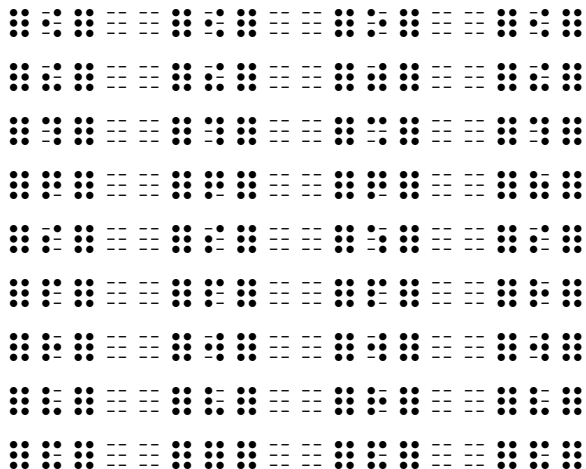
              



「違うものを探しましょう（2）」



(ねらい及び留意点)

一マスの6点の弁別のための教材である。基準となる⠠で囲まれた、あるいは⠠に続く四つから違うもの一つを見つける。左右の逆転した形(鏡字)を意図的に盛り込んであるが、【題材4-11】と同様に、児童の様子を十分に観察しながら、確実にできるようになった題材で確認するなど工夫して支援する。

【題材4-11】と同様に、弁別しやすくするための工夫の一つとして、次のような教材も有効である。二マスを使い、一マス目の④⑤⑥の点と二マス目の①②③の点を一マスに見立てる。そうすると、通常の一マスよりも①②③の点と④⑤⑥の点の間が若干広くなる。⠠ ⠠ ⠠ ⠠ ⠠ など、点の数の多い字の弁別は難しいので、以下のような形で提示して学習を進めるとよい。

⠠⠠⠠⠠ ⠠⠠⠠⠠ ⠠⠠⠠⠠ ⠠⠠⠠⠠ ⠠⠠⠠⠠

ただし、この場合も点字に触れる指先が同時に一マスの枠組み全体に触れることができるように留意する。低学年児童の小さな指に大きめの点字を与えてしまうと、マス全体に触れようとして上下に探る指の動きが出てしまうのでよくないからである。

両指で一つずつ触知しながら、ゲーム感覚で取り組めるとよい。

確実に弁別できるようになったら、弁別の速さを増すようにする。

違うものを探す際に、「右のだよ、だって下に点がないよ。」「二つ目のだ」「左端のが違う」など、言葉を表出させながら探せるようにし、言葉も一緒に育てる意識をもって指導に当たってほしい。

第4節 点字の形と字音の結び付け

1 点字の形と字音を結び付ける意義

両手読みの動作の習得、行とマスという点字の枠組みの意識化、一マス6点を一つの単位とした6点の組み合わせの弁別の学習が進めば、いよいよ点字の形と字音の結び付けに入る。

点字は、ひらがなやカタカナなどと同じで、表音文字である。また、墨字を目で読み取るように一度に何文字かを言葉として読み取ることは難しく、指先に触知される一マス一マスの字を組み立てて言葉として理解して